

奄美ならではの研修 Vol.3 ～ 続々・無人島でよか余暇 ～

大冨 将範, 飯山 清文, 大坪 睦貴, 小藺 真介 (機械電気科)
大谷 泰行 (国 語 科)

1 はじめに

私たち鹿児島県教職員は、県の全域において普遍的で均等な教育を実現するという理念のもと、定期的な異動によって県内各地を赴任してまわる。新任地においてよりよい授業や生徒指導を行うためには、まずその地域の地政学的観点から地域特性等の深い理解が不可欠であるが、そのためには積極的にその地域に溶け込み、主体的に活動し、校外にも積極的に赴く必要がある。特にここ奄美群島区は、地理的にも歴史的にも本土との様相の差異が大きく、一つの行政区（県）の中でこれほど異なる気候・文化を抱え持つ地域は、全国的に見ても稀有であろう。

私たち高等学校職員の奄美群島区での赴任期間は原則として四か年または五か年であるが、県本土域でのそれが七か年から八か年であることを鑑みれば、地域理解に要することのできる時間は比較的短いといつてよい。加えて奄美群島は世界的にも特異な自然環境を有し、世界でもこの地域にしか生息しない多くの動植物が存在し、また歴史的にも近代において薩摩・島津の侵攻・支配を受けていたことなど、鹿児島県職員として身につけておかなければならない知見は県内の他地域のそれに比べても特別である。

奄美大島は、徳之島、沖縄島北部、および西表島とともに 2020 年の夏にもユネスコの世界自然遺産に登録される予定である。島の沿革史として非常に大きな局面を迎える転換期に奄美に赴任している身として、まずは自然環境の豊かさ、亜熱帯気候の特性等について肌身を持って理解しようと、昨年につき 5 年連続での野外宿泊体験を企画・実施した。

2 参加者紹介

(1) 機械電気科 大冨 将範 (写真右から 2 番目)

奄美野鳥の会での月例の探鳥会、奄美ネイチャーセンターでの月例の自然観察会など、奄美の自然を積極的に満喫中。赴任五年目にして奄美の主要林道はほぼ踏破し、現在は使用されなくなった旧林道を風潰しに歩いている。奄美の自然に触れたいと思ったら、まずは大冨に声をかけてみるのもよい。学生時代はかごしま水族館と平川動物公園にてガイドボランティア等に従事。小 4 の夏休みに、父親の U ターンに伴って大阪市から霧島



本文中に登場する島嶼の位置関係



恒例の、出発前の正門前での記念撮影

市国分に泣く泣く（当時）転居。大学の卒論および修論のテーマは「屋久島におけるウミガメの生態に配慮した護岸養浜について」。

(2) 機械電気科 飯山 清文（写真右端）

南薩生まれの南薩育ち、期限付きの勤務校も、前任の初任校も南薩地区。34歳で南薩アルカトラズから抜け出して生活する初めての土地が奄美大島。生粋の田舎育ちであるがゆえに、小学生まで「田舎は空気がうまい」という言葉の意味を理解できておらず、イナカという場所には美味しい味のする空気があるのだと思い込んでいた。奄美に赴任してから、キャンプと釣りに目覚める。大学の卒論テーマは「冷間加工における潤滑油の影響と材料流動の検出方法の検討」。

(3) 国語科 大谷 泰行（写真中央）

伊佐市にある浄土真宗大谷派の寺の長男として生誕。跡を継ぐことも視野に入れ、仏教系の大学に進学。奄美高校に赴任して以来、奄美の自然を満喫することばかり考えている。生まれ育った大口は山ばかりであるが、父親の出身が港町の阿久根ということと、泳ぎが得意なので、海でも十分楽しめる能力がある。京都の寺院巡りが趣味で年に一度は京都を訪れ、またやたらと苔（こけ）に詳しい。大学の卒論テーマは「浄土真宗における真と偽について」。

(4) 機械電気科 大坪 睦貴（写真左から2番目）

地域により深く溶け込もうと、前任校から担任を持つたびに学期に一度はクラスの保護者との懇親会を実施している。どんなことでも経験してみたいと思うチャレンジ精神旺盛な鹿屋っ子。若い頃に遊びの限りを尽くしたので、同じ境遇の生徒の気持ちを理解するのが得意である。奄美の自然をより濃密に堪能したいと今回の研修に参加。大学の卒論テーマは「超音波洗浄とキャビテーションについて」。

(5) 機械電気科 小菌 真介（写真左端）

キャンプ歴は長く、大学時代にはバイクにテントを積んで北海道の宗谷岬まで走破している。前回の無人島キャンプでは、軍用の80リットルのダッフルバッグや多用途サバイバルナイフ、マグネシウム・ファイヤ・スタータ等を新調。現在は更に自然を感じたいと、テントを使わずブルーシート一枚のみでのキャンプを画策中で、今後の方向性が注目されている。キャンプに対する座右の銘は、「キャンプは苦行である」。鹿児島市出身の自称シティ・ボーイ。大学の卒論テーマは「バイオマスの浮遊外熱式ガス化法の研究について」。

3 それぞれの所感

(1) 大富の場合

———また台風が発生したぞ！

好事魔多し、とはよく言ったものだ。

今年も例年に違わず、我われが無人島渡航計画を立てるたびに太平洋は遙か南に台風が発生し、そして決まったかのように、週末に襲来する。

マーフィーの法則ではないが、週末に台風がくるという事実は決して被害者意識に起因するものではないはずだ。食パンを落としたときにジャムを塗った面が下を向いて落ちる確率はその下の絨毯の値段に比例するし、不調を訴えていた機械はサービスマンが到着したとたん正常に運転し始める。台風は決まって週末に襲来し、残念ながら平日（勤務日）にはやって来ないのである（失敬）。

今年は、我われが無人島に通い始めて4年目にあたる。中核のメンバーの多くが奄高勤務5年目、つまり異動対象の年であり、この夏は揃ってハンミヤ島へ上陸するという夢を実現するための、いわば最後の夏であった。

朝9時に、学校地下駐車場に集合した。

時期は9月上旬、体育祭の振替休日で特別に休校日となった平日の月・火である。なにもこれは、世間一般の皆様が額に汗をかいている時間に無人島でのんびりすることが最上至極だから、という邪な理由ではなく、通常の土・日の休日は、なんだかんだでみな部活動や家庭の都合があり、全員の予定を合わせる事が困難だからである。つまり我われにとって一年のうちでこの2日間で黄金の2日間であり、逆に言えばこの2日間しか、全員で揃って無人島を目指すことは出来ない。そして、前々回の紀要から説明するとおり、我われの目指すハンミヤ島は太平洋という外洋に面しており、好天が続かなければ安全上の理由から上陸が許可されないのである。意気揚々と学校には集合したものの、現時点では今夜どの無人島に泊まることになるのか、未だ決定していないのである。

今年度の隊員は大富、大谷、飯山、大坪、小菌の精鋭ばかり5名。誰もがソロキャンプのスキルを備える上、自称キャンプ指導者の有段者ばかりである。車一台で行くことを考え、荷物も含めれば飯山のトヨタ・WISHにぴったりと収まるということで、車は飯山にお願いすることにした。

二日間で使用する、大量の水を準備する。飯山と小菌がそれぞれ個人で20リットルの水タンクを所有しており、タンクは今回もこの二人が持参してくれた。このような感じで、皆が皆のために協力し合いアイテムを持ち寄ってくれるので、無人島という何もない環境であっても快適に過ごすことができる。もし一人で無人島に挑戦しようとするれば必要な道具を全て個人で揃えなければならず、金銭的な面からも現実的でない。まして我われは本土出身の転勤族、常に「帰り」のコンテナ容量を意識してモノを買わなければならず、物欲のままいたずらにモノを増やすわけにはいかないのだ。みんなで使えるものはありがたく共有する、まさしく我われは皆でONE TEAM、一蓮托生のキャラバンなのである。

大坪は、数日前の部活動で少し無理をしたらしく、歩くだけでも腰が痛い状態で、この無人島キャンプ自体に不安を抱えていた。にもかかわらず、少し目を離した際に、20リットルのポリタンクに水を入れ、ウンウン唸りながら一生懸命になって一人で運んできた。無人島を目指す最中に発せられるアドレナリンには究極の鎮痛作用があるようだ。人生、常に無人島を目指していればどんな痛みにも耐えられるのかもしれない。

天気は良好、道は順調、アラフォー世代が一度は口ずさんだ EAST END×YURI の 2nd シングル MAICCA を脳内にトリップさせながら、一路古仁屋の街を目指す。船長には13時に船着き場に来てくれと言われたのだが、そこはあえて12時くらいに着くことにする。これまでの経験から、早く着いたらその分早めに出発してくれることが分かっているからである。時間に寛容である、いわゆる「島時間」は、よい方に利用するに尽きる。無人島での滞在時間は、少しでも長いほうが良いのだ。11時半頃、古

仁屋に到着。A コープせとうち店で弁当を購入し、近くの公園の東屋で昼食とした。これからまる一日、無人島で原始的生活が待ち受けている。最後の晚餐ではないが、特盛りの天井を音を立ててかき込み、俗世間との別れのセレモニーとした。

少し早めに船着き場に到着。もう4年の付き合いになる船長と（といっても年に一度会うだけだが）、挨拶もそこそこに船に荷物を積み込む。さらに4年目ともなれば一人ひとりが何をすればよいか、どう動けばよいかを心得ていて、互いに協力しながらテキパキと出港の準備を進めていく。船に荷物を積み終わると、断ることもなく操舵室にも入り込み、小菌などは一人で舵を握りしめ操舵の真似ごとに入っている。まるで自分たちの所有する船に久々に乗った、そんな感じである。そう、もはや我々は「船で遠洋に出る」こと自体に慣れっこになっていた。いや、正確に言えば、その行為自体に新鮮味を失っていた。奄美に何年も生活していると、紺碧の海を目にして何も感じなくなるのと同じである。まして、この島で育った生徒諸君に関していえばこの世界こそが当たり前の世界、普段の自分が授業の合間にそうするように、海や山を見て感動しろと目くじらを立てる方がどうかしているのだ。我々も奄美大島に籍を置き、この素晴らしい環境に対しての感度が鈍っているという点においては立派な島人（しまんちゅ）なのである。だからこそ、我々は、未だ足を踏み入れたことのない新境地に足を踏み入れ、鈍化した「感動する気持ち」を初期化することに価値を見いだしている。そして今年もまた、それを大義名分として性懲りもなく無人島を目指すのである。

今回目指す島は、須子茂離島（スコモバナレ）という無人島である。古仁屋の町から海向かいに見える加計呂麻島を挟んで、ちょうど反対側の外洋に浮かぶ島で、そこへ到達するには加計呂麻島をぐるっと半周しなければならぬ。つまりスコモバナレは、数ある無人島の中でも古仁屋から最も遠方に位置する、渡航に時間を要する無人島である。なぜこの島への渡航が無人島探訪4年目のこの時期になったかといえば、それは渡航のための天候条件等が揃わなかったというのもあるが、それ以上に船長が案内を渋っていたからである。どういうことかという、つまり、突然に船長を訪ねて「無人島に行きたいから送ってくれ」とお願いしても、船長とて海の最高責任者であるから、よくわからない一見さんの一行をほいほいと危険な場所に案内することはしないということである。我々には船長との間にこれまでの4年間で培った信頼と実績があるからこそ、「君たちならこの島でも十分やれるだろう」という判断で許可が下りたのである（…と思っている）。つまり遠方で渡航困難な島にOKが出るということは、船長が我々のスキルを一定評価してくれているという証なのだ（そのはずだ）。我々が船上に積み込んだ荷物を見て、ふと船長が「ふふふ… 荷物の量が少ないねえ… 他のグループはもっとたくさん持ってくるよ、あなたたちが一番少ないよ」と笑みを浮かべた。無人島という何もない場所を最小限の装備で満喫できる、つまり客観的物証をもってしても、我々のアウトドアスキルはこの4年間で確実に成長しているのがあった。

大海原の蒼い海を切り裂きながら、船がトップスピードで進んでゆく。ノットという速度単位を肌感覚で知らないのナンセンスなことは承知の上で国際単位系でいえば、時速40キロくらいだろうか。右手には、4年前に初めて無人島宿泊研修を行った江仁屋離島が見える。2018年から19年の大晦日の夜に、テレビ朝日が「無人島0円生活」を生中継した島こそ、この江仁屋離島である。4年前、江仁屋離島に降り立った我々は、自分たちはとんでもない地の果てに来てしまったと、その現実に立ち震えていた。しかし今はどうだ。その江仁屋離島が、とてもちっぽけな、馴染みの島に格下げされている。我々

はもはや、江仁屋離島などには引率か何かで頼まれてもしない限り上陸することはないだろう。

船に揺られること1時間ほど。目指す須子茂離島まであと少しというところで、船長がふと、「ユーバナレに寄ってみる？もしよければ今回はそこでもいいんじゃない？」と提案してきた。ユーバナレとは、正式名称を夕離島といい、須子茂離島の北西部に位置する、須子茂離島の6分の1ほどの小さな無人島である。もちろんこの島にもいつかは上陸したいと思っていたので、今回はとりあえずスコモバナレと頭に決めていた我々にとっては降って湧いたような話で、それはそれで飛び上がるほど面白い提案であった。何しろこの島は数ある無人島の中でも上陸の条件が厳しく、干潮の時間帯にのみ海面から顔を出す岩場の上を飛び石の上を跳ねるようにして上陸するほかないという無人島で、ひょっとしたら今のタイミングなら上陸できるかもしれないという船長からの提案であった。もしユーバナレに上陸可能なら、今回の探訪地は急遽ここに決めようということで、我々は船の舳先から夕離島の端に位置する岩礁の上に飛び乗った。記念すべき夕離島初上陸である。とりあえず荷物は船に置いたままにして、島の砂浜の方まで到達できるかどうか様子だけ見に行ってくればいいという船長の言葉に従い、磯の波しぶきを避けながらガレ場を進み、遠くに見える砂浜を目指す。

途中、ふと目を落とした磯溜まりに、これまでに見たこともないピンク色をしたマイクロアトール（微環礁）を発見。しかもその脇には、奄美大島では数が減りもうほとんど採取できなくなった希少価値の高いシラヒゲウニが2匹おり、さらにはイソギンチャクがなびき、カクレクマノミが数匹優雅に舞っているではないか。自然界の芸術を凝縮したかのような色彩が、幅1mほどの磯溜まりに詰め込まれており、ここはもう本当に奄美の中でも残されたワンダーランドであった。何が何でもこの島にテントを広げたいと思いさらにガレ場を跳びはねながら突き進んだが、ある程度進んだところで、泳ぐ以外に向こう岸まで到達できない箇所当たってしまった。もう少し潮が引けば何とか渡れるのであろうが、ここで潮が引くまで待つわけにもいかない。あと少し時間がずれていれば、今回はユーバナレが研修の舞台になっていただろうが、これも運命である。ユーバナレへの気持ちをスパッと断ち切り、我々はスコモバナレを目指すため船へと戻った。



須子茂離島が見えてきた。島に近づくにつれて水深が小さくなり、海底がうっすらと見え始める。それを見て、改めて水の透明度の高さに目を見張る。海の沖合など水深が大きい場所では、海の水がいくら透明であっても海底までは光が届かないために、海の色は無限大の青、つまりもはや黒く見えるので（これが黒潮の名の由来でもあり）、水の透明度を確認することができない。しかし水深の小さな場所で海底まで光が届くような場所まで来ると、まぶしいほどに白い海底など、認識できる対象物が出現するため、改めて透明度を知ることができる。奄美に住めば、普段の生活の中で海は常に身近な存在であり、海を見る度に「ああなんてきれいな海なんだ」と感じるが、スコモバナレの海はその感情をはるかに凌駕するほど透き通った薄水色の海だった。

「着いたよ、降りてー」

真っ白い砂浜に軽く船首を乗り上げて、船長が可能な限り船を島に近づけてくれる。といっても、棧橋など存在しない砂浜である。波打ち際まではまだ十数メートルはあり、海に浸からなければ上陸でき

ない。まず自分が海の中に降り、太ももあたりまで水に浸かりながら、船の上から荷物を受け取る。それを頭の上に載せ、自身が荒波で転倒して荷を水に濡らすことがないように踏ん張りながら、バケツリレーで陸揚げ作業を行う。全ての荷を降ろしたところで、振り返って皆で船長を見送る。

「ではまた、明日の13時にお迎えをお願いします！」

エンジン音を豪快に響かせながら、船はあっという間に見えなくなった。



まずは全員で島の探索から始める。例え一晩といえど、島の全容を頭の中に叩き込んでおかなければ、その島を“支配”することはできない。島の砂浜の端から端まで歩いて、地形や植生などを観察するとともに、今夜テントを張る場所を決定するのだ。

スコモバナレの浜は、結論から記せばこれまで訪れた無人島の中でもっともキャンプに適した浜であった。まず、浜の奥行きが大きく、満潮になった時でも浜には広大な砂浜が残るので、活動できる範囲を確保できる。また、浜の北端には古代の造山運動により形づくられた巨大な岩崖が垂直にそそり立ち、これが日中に適度な日陰をもたらしてくれるので、そこに荷物を置いたり、あまりに日差しが強い時にはそこに逃げ込んだりすることもできる。そして、最も特筆すべき特徴は、浜の南部の背後地が数十メートルにわたって砂の吹き上がりになっており、それはまるで砂の滑り台のようで、つまり小さなハンミヤ島の様を呈している。ハンミヤ島の造形は、年間を通して島を吹き上げる風の作用によって形づくられたらしいが、このスコモバナレの形状についても、同じような気象条件により出来上がったものなのだろう。とにかく他に類を見ない浜の形状であり、特別感のある島であった。

浜の中央部辺りで奥行きが最も広く、渚から最も遠い背後地の植生域の手前に、直径20センチほどの綺麗な円形のくぼみがあった。くぼみは深さ5センチ程で、縁は不自然なほどに切り立っており、その縁の海側の方からたくさんの小さな足跡が海に向かって一直線に延びていた。地理的に考えておそらくアオウミガメの子ガメが巣から脱出した跡と思われた。砂に残された足跡の風化の程度から見るとかなり前に脱出したようであったが、飯山と二人でとりあえず掘り返して孵化率などを調査してみようという



ことになり、一心不乱に素手で巣穴を掘り返した。ウミガメの巣なら、巣穴の奥底から残された卵の殻や発生が進まず死んでしまった未受精卵、脱出できずに力尽きて死んでしまった子ガメなどが出てくるのが常である。砂はさらさらで、素手であっても掘り返す作業自体に苦労はなかったが、掘れどもほれども何も出てこず、アオウミガメが掘るのと同じ深さ80センチほど掘ったところで調査を断念した。巣穴に残された有機物がすべて分解され消失した可能性も考えたが、いくら夏場とはいえ土に還るにも数か月はかかるはずである。巣穴の周りにはカニが掘ったと思われる直径2~3センチの穴が、ウミガメの巣の底の方に向かって何本か延びていたので、カニが臭いを頼りにウミガメの巣の底まで穴を掘り進め、残った有機物を食べ尽くしてしまったのかもしれないが、卵のかけら一つ出てこなかったことは最後まで謎である。

浜の背後地の植生域で、これまで目にしたことのない花を見つけた。私は月に一度の定例で、「奄美ネイチャーセンター」という自然観光会社の主催する自然観察会に参加しており、自身でも普段から身の回りの植物を観察することを日課にしている。一応、生活の中で目に付く植物は、その名前とおおよその生態まで知っているつもりであるが、そんな自分がふと、これまでに目にしたことのない花を目に留めたのである。名前の分からない植物を見つけると、その正体がわかるまでは靴の中の小石ばりに気になる性格のため、私は普段からそのような植物を見つけると、iPadで写真に収めて後日ネイチャーセンターのスタッフに見てもらい、種を同定してもらうようにしている。この時に撮影した花も例に漏れず、観察会の合間にスタッフの一人に見てもらった。その瞬間、それを見たスタッフは「おっ！」と声を上げ、「大富さん、これどうしたの！どこで撮影したの!？」と興奮気味に反応した。ここでは自然保護の観点からあえて名を伏せるが、奄美大島では近年、愛好者による採集などで数を減らしている種とのことで、スコモバナレで撮影したと告げたところ、「ああ、そのあたりまで行けばまだあるよね～、大富さん、いいもの見たね～！（そんな希少種に気付けるなんて、あなたも成長したね～!）」と、少しばかり褒めていただいた。ちなみにスタッフといっても、その方々はみな60代半ばから70歳以上の、人生の大先輩ばかりである。にもかかわらず、定年して身軽なことをこれ幸いに年に一度は世界の山に出張して、動植物の観察に研鑽を積まれている。去年は南米はギアナ高地のエンジェルフォール（落差が世界最大の滝で、あまりの落差ゆえ川の水がすべて落下の途中で霧に変わってしまい、滝壺が存在しない滝）を見に行き、その前はネパールまでセイタカダイオウ（寒冷地に適応したタデ科の植物で、大きな半透明の葉を幾重にも重ねて株の中心に自ら温室を作り、その中心に花を咲かせる高さ2m程の草本）の観察に行き、「ネパールからの帰り道だからついでに」という理由で富士登山までこなしてくるなど、本当にアグレッシブな専門家の集団である。そんな彼らが奄美の山は世界に誇れる生態系を持っているといっていてやまないのが、奄美の自然は本当に世界遺産に値するものなのだと納得できる。いずれ自分も転勤で奄美の地を離れることになるが、この人たちとお別れしなければならないことは本当に口惜しい。

ところで、スコモバナレに着いてからというもの、今この島を探索中も、我々はアブの襲来を受けていた。体長3センチほどの大きなウシアブが我々の血を吸うために頭の上をぶぶん飛び回ってまわりついてくる。隙あらば人の肌にとまり、尖った口吻で肌を切り裂いてあふれ出る血液を舐めとろうと画策しているのだ。幸いなことに、アブはその巨体ゆえひっそりと近づいてくることができないので、蚊と違って知らずしらずのうちに血を吸われるという心配はない。彼らの動きを目と耳で追ってさえいれば、体にとまったところを叩き落とすことができる。ところが、困ったことに一匹を仕留めても数分後には別の個体がやってくる。島に着いてから1時間あまりはその時間が続いた。ちなみに後学のために林先生も知らない初耳学を記しておくが、アブは人の肌にとまっても、蚊と違ってすぐに刺したりはしない。彼らは人の体にとまると、そこが間違いなく肌（餌場）であるということを確認してから刺しに来る。彼らはそれに5秒から10秒ほどの時間を要するという性質を持っているので、こちらは慌てることなくその間に叩き落せば大丈夫である。つまり、アブに襲われたときはむしろ体を動かさず、彼らを積極的に体にとまらせてやって、それをしっかりと確認してから叩けばよい。これを知らなければアブの襲来を受けてパニックになること必至なので、知っておいたがよろしかろう。なお、彼らは蚊と同じく人を襲うのはメスのみであり、また薄い生地 of 服ならその上からも刺してくるので注意してほしい。自分一人でも10匹以上のアブを退治しただろうか。気が付いた頃にはアブの襲来は治まっていた。まさか島のアブすべてを叩き落したとは考えづらいので、おそらく彼らの活動時間帯のピークを過ぎたのだろう。いつしか、島に静寂が戻った。

踏査の戻りに、みなで焚火をするための流木を拾いながら歩いた。焚火は、今回の研修の全行程を通してもっとも楽しみにしている活動の一つである。むしろ我々は、気兼ねなく焚火をするために無人島に渡っているととっても過言ではない。さらに、焚火といっても、我々はただ火を愛でるためにそれをするわけではない。夜食の調理のための熱源として焚火をするのである。一般的には、BBQをしようとなればホームセンターで購入した木炭を使用するところだろう。しかし我々はキャンプを重ねるうち、薪を燃やして時間をかけて燠（おき）をつくり、その火で調理を行う術を身に付けた。現に今回のキャンプについても、我々は木炭を持参していない。木炭代が節約できる上、その分の荷を減らすこともでき、（さらに確実に後付けだが）何より東南アジアで生産された木炭はフードマイレージならぬチョコレートマイレージが高いので、SDGsの精神に沿って使用は控えよう、という魂胆である。砂浜に打ち寄せられた流木は我々にとってハンドメイドの素材や水槽の飾り付けアイテムではなく、バイオマスエネルギーそのものなのである。

SDGs ついでに、ちょっと環境のことについて脱線するが、私は奄美に赴任してすぐに、原付バイクを購入した。奄美に来るまで、まさか自分が高校以来のバイク生活を送るなど考えもしていなかったのだが、実際に名瀬の街に住んでみて、日常生活が意外とコンパクトに完結することに気が付いたのだ。名瀬の街は通勤するのも買い出しに行くのも数キロ圏内で事足りるので、極端な話自転車でも生活できるほどだが、さすがに自転車の選択肢はないとして、バイクがあれば便利だということに気が付いた。さらに購入動機を決定づけたのは、奄美の美しい海と山の絶景だった。奄美に来てすぐに春の陽気の中、車で島をドライブしたのだが、丘を越えて眼下にエメラルドグリーンの海が広がる光景を、自分は窓ガラスと鉄の柱に囲われた箱の中から眺めていた。その箱の中において外の空気を浴びることができないことに、馬鹿バカしさを超えて虚無感すら覚えた。この島でバイクに乗らないなんて、ワンガリ・マータイさんなら間髪を入れず「MOTTAINAI！」と叫んでいるはずだ。

透き通った海を眺めながら気持ちよい潮風を浴びて海岸線を走ったり、ヒカゲヘゴの木漏れ日の下をちょっと冷たい空気を切り裂きながら走ったりできるなんて、考えただけでも垂涎の極上の時間である。俗説ではバイク乗りは昔、馬に跨がっていた武士で、生まれ変わった現代においてもそれを忘れられず鉄の馬を欲するとのことだが、とにかくこの環境の中において、自分の本能がバイクに乗れと訴えてきた。それに島は基本的に年中暖かいので、乗ることができる時間も相対的に長い（実際は1年中乗れる）。そう思って早速、ものは試しと学校近くの、島で一番大きいと思われるバイク屋を訪れた。奄美にいる間だけ乗ればいいし、ピカピカの車体は傷や汚れなどの気苦労が絶えないと思い、狙うは中古車である。店頭には原付だけでも十数台の中古車が店の前の歩道にまで並べられており、そのうちの何台かが希望の条件を満たしたものだだった。車体の状態や走行距離などを見ていると、店主のおやじさんが声をかけてきた。「そこにあるバイク、早く買わないとすぐなくなるよ。」またまた一、即決させるためのセールストークだとしてももうちょっと上手い言い方があるでしょーが、くらいにしか思わず、その時は「そうなんですね」と軽く相槌を打ち、とりあえずもう少し考えようと店を後にした。2日後、やっぱり気になったバイクをもう一度よく見てみようと思つて店を訪れると、なんとそれらのバイクが店頭から消えているではないか。歩道には変わらず10台ほどのバイクが並べられていたが、そのほとんどが以前のバイクと入れ替わっていた。「また来たの？早く買わないとなくなっちゃうよ〜。もう在庫があるだけだよ。」店主の話は脅迫でもセールストークでもなく、来店客への的確なアドバイスであった。自分と同じような境遇で島に赴任してきて同じ発想を持つ人は多いらしく、4月のこの時期、特に中古のバイクは飛ぶ

ように売れるとのことだった。今日、決めねば。大きな買い物なのでその場ですぐに妻に電話し、「衝動買いしてもよいか」と冷静に相談し、二つ返事をもろう。店頭にある在庫の中から2つにまで絞り込んだのは、ホンダの高級スクーター「ジョルノ 50」と、スズキの通勤快速こと「アドレス 125」である。原付、というと狭義ではいわゆる 50cc のミニバイクを指すが、正確にはバイクは 125cc までは原付 2 種という区分で、任意保険でも原付特約の中に入る。ちなみに原付特約は車と同じ補償内容（対物・対人 無制限）でどこもだいたい年 1,000 円くらいで付帯でき、これは実質的には無視できる金額である。程度の差はあるが、ジョルノは 7 万円、アドレスは 10 万円。私は、小菌に比べれば足元にも及ばないが、さしあたってホンダ党である。ジョルノにも一度は乗ってみたい。一度、小菌に「何でホンダが好きなの？」と尋ねたことがあるが、「いや、好きというより、車の設計とか構造とか企業理念とか、見ていったら、ホンダが残りませんか…」との答えで、これには痛く賛同した。しかし、さんざん悩んだ結果、島で相棒とするバイクはスズキのアドレス 125 に決めた。理由はいくつかあり、まず排気量が大きいのので余裕を持った運転ができることと、いざというときは二人乗りが可能だという点である。125cc だけあって車体も 50cc クラスより一回り大きく、メットインもヘルメットが 2 つ入る設計になっている。それに 50cc ならば制限速度が 30 キロなので常に速度制限を意識しなければならないが、125cc なら車の流れに沿って走ることが可能だ。職務上、これは重要なファクターである。

「アドレス 125 が 10 万円か～」と渋っている様子を見せ、「もうちょっと勉強してもらえませんかね～」と店主のおやじに意味深に尋ねる。「う～ん、じゃあ、9 万 5,000 円でいいよ」と、店主。「ありがとうございます！でも出費が痛いな～…買うべきかどうか迷ってるんですけど、最後の最後に、優柔不断な僕の背中を押してもらっていいですか！」「わかった…じゃあ、自賠責保険をつけてあげるよ…」とのやりとりで、めでたく契約に至った。ちなみに自賠責保険のサービスはてっきり 1 年間分だけかと思っていたが、後日しっかりと確認すると、なんと 5 年間分も付けてくれていたので、実質 1 万円ほどの割引を取り付けたことになった。購入前の立ち話で、通勤族なので 5 年間乗ればいいという話はしていたものの、何も言わずにしっかりと 5 年分の保険を付けていてくれるなんて、立ち話の重要性もさることながらおやじさんの心意気に頭が下がるばかりであった。

閑話休題。私がここで訴えたいのは SDGs がらみでバイクは自動車より環境負荷が小さいとか、バイクは爽快で便利だといったことではなく、「バイクには乗りたいけど、バイクを買うほどの金銭的余裕はないよ～」と、家計の事情からバイクの購入に二の足を踏んでいる方へのアドバイスである。考えてみてほしい。バイクはその排気量の小ささゆえ、自動車と比較して格段に燃費がよい。極端な例ではあるが、最新のホンダのスーパーカブ 50 の燃費は、リッターあたり 105.0km（カタログ値）である。さすがに実測でこれほどの燃費は出ず話半分として、仮にバイクの平均燃費がリッター 60km だとしよう。今乗っている自動車の燃費がリッター 15km だとすると、その 4 倍の燃費を誇るのだ。もし今、ガソリン代として月に 8,000 円を支出しているのなら、バイクに乗ればその 4 分の 1、月に 2,000 円で済むことになる。つまりこの場合、月に 6,000 円の節約になるのだ。そうすると 1 年間バイクに乗れば、12 か月分で $6,000 \times 12$ の 7 万 2,000 円も節約できることになり、2 年経てばおよそ 15 万円を得られることになる。これは中古のバイクを一台購入してなおおつりが出る金額である。つまり、実際には雨の日など必要に応じて自動車を使っても、バイクは 2 年で、実質タダで入手できることになる。

バイクがあればそれこそ、きんと雲を得た孫悟空のようにフットワークも軽くなるので、金銭面でバイクの購入を迷っている方は今すぐ購入するが得策である。

まだ明るい、気がつくともう大坪がもう焚火を起こしている。この、だれもが思いのままに自由に火を愛でることのできる環境が最高にいい。各自それぞれのテントを設営し、夜の照明となるLEDライトを吊すためのロープを、ベースキャンプ上空に張り巡らせる。ロープをどの岩からどの岩に、どうやって結ぼうかなど、皆で工夫しながらその場の環境に応じて設営を行くことが、格別に楽しい。浜に打ち寄せられた大型のゴミを使って、生活しやすい環境を作り上げる。壊れたバケツをひっくり返して台にし 20リ



ットルポリタンクを置いて、水道にする。元はボートの底素材と思われるプラスチックの大きな板を水平に設置して、机にする。大きな漁業用の発泡スチロールを、そのままチェアにする。短時間で立派なリビングができあがった。すぐそばにハマゴウの可憐な花を見つけたので、鉋で何本かを切り取り、これも浜に打ち寄せられていた細い紐で束ねて卓上用の手筈を作った。ハマゴウはシソ科の木本で漢字で浜香と書き、名前の通り全草にユーカリに似た芳香がある。使うたびによい香りが漂っていい具合であった。

夜の帳が下りた。皆で焚火を囲みながら、思いおもいに肉を焼き、酒で喉を潤し、雑談で大いに盛り上がった。日本の社会では、これまで組織で業務を潤滑に運営するのに「ホウ・レン・ソウ」が叫ばれていたが、これからの時代にはそれにも増して「ザッ・ソウ」が重要となってくるらしい。つまり、日頃から雑談を積極的に交わすことで互いの理解が深まり、相談しやすい環境が生み出されて組織は ONE TEAM になるということだ。我々も雑談に花を咲かせていたわけだが、といっても話していた内容といえば、小菌が「最近、定時退校しろ定時退校しろと現場の圧が強いなあ。いっそのことテージ（イタリア・ビモータ社的高级バイク）に乗って帰宅して、『テージ退校です』って言い張ってみようかなあ」「やめとけ、そしたら朝来るときは『テージ出勤』になって遅刻ギリギリで注意されるぞ」「くそダメか（笑）」程度のものである。

一通り腹も膨れ、薪もすべてが燠に育ったころ、大坪が「つまみが欲しいから、貝獲りに行こう！」と言い出した。このところの無人島キャンプではいつも夜になると磯場で貝を採り、夕食の一品とするのが恒例となっていた。昼間は何もないように見える磯場も、夜になり辺りが暗くなると、どこからともなくたくさん生き物がぬるぬると湧き出てくるのだ。大坪はこの貝採集がたまらなく好きらしく、今回もキャンプの計画の段階から「貝はどんなのが獲れるかな」「この前食べた貝、美味しかったよね？」など事あるごとに話していた。その大坪と、貝採集に一家言のある大谷を筆頭に、全員でヘッドライトを装着して漆黒の磯場に出向いた。獲れたのは、アワビに似た食感のオオベッコウガサ（大鼈甲笠）、独特の苦みが病みつきになる巻貝のホソスジテツボラ（細筋鉄法螺）、見た目が亀の手のような甲殻類（エビの仲間）のカメノテ。そして、磯の波打ち際に、トビハゼのような黒い魚が点在しているのを見つけた。網も何もなかったので、皆でぴょんぴょん跳ねて逃げ回るハゼを素手で押さえながら捕まえた。逃げるハゼを見て、そのうちだれかが「逃げるな、ぜーやん！」と叫んだ。「ぜーやん」とは、昨年まで奄高に在籍した同僚のハゼヤマ（女子）のニックネームである。みんな「ぜーやん」を思い出して懐かしくなり、会いたくなかったのか「ぜーやん！ぜーやん！」と連呼しながら、波に打たれることもいとわず一心不乱にハゼを追い回し、現場は「ぜーやん祭り」と化した。

捕まえた貝はいつものように炭火焼きにして味わったが、今回は魚もあるしせっかくだから魚介スープも作ってみようということになった。全ての貝を鍋に入れ、ゼーやんはカリカリに焼いたほうが干物のようになって出汁がよく出そうだったので、炭火で少し焦げるくらいまで炙ってから鍋に入れた。30分ほどコトコトと煮込んだ後、コーヒーフィルターに少しずつ垂らしながらアラを濾した。暗がりの中で調理していたのでそれまではよく分からなかったが、出来上がったスープをライトで照らしてみると、そこには眩いほどに透き通った黄金のだしが出来上がっていた。「うおっ、すげえ」と全員が色めき立つ中、そこに飯山が持ち合わせた味噌を溶いて、おそるおそる味見する。「うめえ!」「最高!」。P S P (パリ・サツマ・プロジェクト) のだし王子もはだしで逃げ出すできばえ (韻を踏んだ、失礼) の、最高に旨いだしスープであった。この時の味は生涯忘れることはないだろう。

夜が更け、それぞれがテントの中に引き込んだ。無人島キャンプでは基本的に外洋に面した浜にテントやタープを設営するので、毎回風の心配こそするものの、今回についてもそれは杞憂であった。むしろその逆で、この夜は風が全くなく非常に蒸し暑かった。テントは入口とその反対側の通気口も開け放ち、何も被ることなく横たわって寝ているだけなのだが、少しでも動くとき汗が噴き出してくるほどで、寝苦しいことこの上ない。眠りに落ちては不快を覚えて目が覚める、というのを何度か繰り返して、そのうち夜が明けた。結果論ではあるが、今回のキャンプに限ってはテントは無用の長物であった。テントは外に吹く微風を完全シャットアウトし、人が発する蒸気を内に閉じ込めるだけで、簡易のサウナ室を形成するだけの代物であった。小菌はあまりの暑さに全裸で寝たそうだが、こんなときこそ普段から提唱している「ブルーシート一枚だけでの野営」を実践できるチャンスであったと悔しがっていた。

日が高くなった。ランチを済ませ、悠久の時を確かめるようにポーッと海を眺めている時だった。どこからともなく、かすかではあるが黄色い声が聞こえた。おかしい、去年の枝手久島キャンプには女子が2人参加したが、今回は野郎ばかりである。空耳かと思えたその声は、近づいてくる船のエンジン音とともに、少しずつ大きくなってきた。沖を見ると、なんと弾けるようなビキニのギャルが4人、船の上から体を乗り出しこちらに向かって手を振っている! こちらも元気に手を振り返すと、向こうもさらに大きく振り返ってくれた。この島に上陸してくるのだろうか、もし上陸してきたら無人島の漂着者を装って「今は平成何年ですか」という問いからアイスブレイクしよう準備をしていると、ギャルたちを乗せた船は少し沖合で停船した。そこから海に飛び込むギャルたち。マリンサービスのダイビング船で、スコモバナレのサンゴ礁を目当てにやってきたようだ。ああ残念、上陸はしないのか…と思ったその瞬間だった。自分を除く野郎4人(もう一度あえて名前をさらすと大谷、飯山、大坪、小菌)が、一斉に走り出し、トライアスロンのスタートかといわんばかりの勢いで海に飛び込み、沖に向かって泳ぎはじめた。自分は正直なところ出遅れた感もあって、テントサイドに残り4人の動向を注視した。小菌を先頭に、泳ぐといっても瀬戸大也のようにスマートに泳げるわけもなく、ギャルを確認しながら顔を出して泳いでいるので、その様相は新たなUMA 人面カピバラかヌートリアの群れのようなようであった。ゆっくりとギャルに向かって一直線に泳ぐ一行。ギャルは相変わらずサンゴ礁を観察しており、プカプカ浮いたり潜ったりを繰り返している。泳ぐ野郎。浮くギャル。泳ぐ野郎。浮くギャル。を、じっと観察していたのだが、んんっ? 泳げど泳げどギャルに到達しない。いくら泳いでもギャルまでの距離が、ある一定以上縮まらないのだ。否、よくよく見ると、ギャルたちも少しずつ沖の方に向かって移動しているのではないか。あれよあれよという間に、ギャルたちは船に上がり、今度はとても到達できないほど遠くのポイントまで移動して、再びダイビングに興じ始めた。傍目に見る限り、福本伸行先生の『最強

伝説 黒沢』の黒沢がホテルの室内プールを傍若無人に泳ぐシーンを彷彿とさせる、虚しい結末であった。

船長から電話が入る。「天气が回復してきたから、ハンミヤ島に行けるよ。帰り道に寄るから、その分早く島を出よう。すぐ出発できるように、荷物はまとめて波打ち際まで運んでおいて！」前日から、海は荒れているけど、もしこの後天候が回復に向かえば帰りにハンミヤ島に立ち寄れるかもしれないと聞いていたので、それが確定したときは全員でガッツポーズすることだった。

迎いの船に荷を積み込み、焚火のあとを砂で埋めて立つ鳥跡を濁さずの精神でスコモバナレを後にする。ほどなくして、ハンミヤ島が見えてきた。もっと近づいてから撮ればいいものを、みな興奮してその姿を何枚も写真に収める。

ついに、ついにハンミヤ島への上陸が叶う時が来た。思えば5年前、一緒に奄美に赴任してきた小菌と二人、とりあえず奄美の大自然の中に身を置いてみよう、右も左もわからない土地勘のまま瀬戸内町のヤドリ浜でキャンプした。二人でビールを酌み交わしながら、自分たちはとんでもない地の果てに来たもんだ、この職業に就いてなければ今この瞬間ここにはいないよな、などと感慨深く語り合ったものだ。そのころにハンミヤ島の存在を知り、いつかは無人島でキャンプしようと語り合った。それから少しずつ仲間が増え、毎年のように無人島でキャンプし、集大成となるこの5年目の今、ついに夢のハンミヤ島に行きついたので。

おもむろに小菌が、「大富先生、一緒に写真を撮りましょう」と声をかけてきて、二人で自撮りに納まった。小菌にも思い当たる節があったのか、確認こそしなかったが、本当に目頭の熱くなった瞬間だった。

「遠浅で船は寄せられないから、ここから泳いで行って！」ハンミヤ島まであと数百メートルほどあると見えるが、船長は構いなしである。何度も言うが、私はこの船長の無謀さが大好物だ。船長の指示に従って大坪と小菌が下船用はしごを船首に設置し始めた。このハンミヤ島を前にして、透き通った海を前にして、はしごで降りる？ 心のワンガリ・マータイとともに、「MOTTAINAI！」と叫びながら海に飛び込む。信じられぬほどの透明度だ。海底の珊瑚とほかの4人が泳ぐ姿を観察しながらゆっくりと島に向かって泳ぐ。みんなで、産卵に来たウミガメのように、砂の感触を確かめながら上陸した。



ハンミヤ島は、静かにそこに佇んでいた。黄金色に輝く砂浜が、ビルでいう10階くらいの大きさであろうか、高く聳えている。奄美高校の校舎が6階建てで、その高さには見慣れているので、10階以上の高さがあるというのは決して的外れな感覚ではない。砂浜の斜面の角度は、実際は30度程度と思われたが、そこを登坂した感覚でいえば、足が砂に捉われて歩みづらいこともあって45度かそれ以上に感じた。ふと後ろを見ると、当たり前ではあるが残りのメンバーがぞろぞろと着いてくる。芥川のカンダタなら「やめろ！お前たち！ここは俺だけのハンミヤ島だ！」と叫ぶのだろうが、そうすると天変地異が起こりハンミヤ島が地震とともに崩れ去ることになる。その気持ちはおくびまでに留めて全員で仲

良く登坂することに決めた。途中、あまりの坂のきつさにまいった小菌が、「ここでビバーク（緊急避難的な露営）をして、明日頂上を目指しましょう！」とよく分からない提案をするほどの厳しい登りであった。

ハンミヤ島の頂から見た奄美の景色は、ただただ美しく、感無量だった。本当に碧く、どこまでも澄んだ空と海。この瞬間、我々は「世界でもっとも奄美を感じている人」に認定されていた。

10分間ほど、山頂で最高の気分を満喫しただろうか。気が付くと、ほかの4人はもう下山して、遙か眼下の海の中に興じている。その4人が本当に豆粒のように見えるほどの高さである。

「ピューーイーッ！」

海上の船長が、指笛を鳴らす。帰りの時刻になった、船に戻って来いという合図である。海の男の指笛はただの格好つけではなく、実用的で、そこがまた格好いい。奄美では生活の中に指笛を鳴らす文化が根付いているが、ことある毎に練習してみたものの、結局未だに出来ず仕舞いである。

ハンミヤ島の砂の斜面を駆け下りた。10歩ほど走ったところでトップスピードになってしまい、もはやブレーキも効かない。申し訳ないが、自分は未だに身の程知らずで、気持ち的には20代前半のころと身体能力に変化はないと盲信している。何とかなると思ったのも束の間、急斜面を駆けているので、水平面ではありえないスピードに耐えきれず、そのまま漫画で雪だるまになってしまうかのような勢いで派手に転んだ。砂の上なら転んでも問題ないだろうと高を括っていたが、いくら砂といえどサンゴの砕けたマイクロ・ガラスのような砂である。2・3転するうちに全身に擦傷を負い、また肩が脱臼するんじゃないかと言わんばかりの衝撃も受けた。こんなところで大けがなどすれば、自分はよいとしてもみんなに迷惑をかけてしまうところであったので、逆にこの程度で済んだのはラッキーだった。海に入ると全身に塩が沁みたが、ハンミヤ島に登頂できたこの幸福感の中では、それもまた一興だった。

実はこの一連の、山頂から走り出して転倒し、ふもとの砂浜にたたきつけられるまでの様子を、飯山がカメラで撮影していた。あとで客観的に見させてもらったが、まるでジャッキー・チェン映画のエンディングに出てくるNGシーンのようで、やはりあのような無謀なことはすべきでない。撮影していた飯山も「途中で死んだんじゃないかと思いました」との弁だった。

船に上がったみんなの顔は、とても晴れ晴れとし、また満足感に溢れていた。自分の一生のハイライトシーンだけを撮影したネガフィルムがあるとすれば、間違いなくその一コマを飾る、貴重な体験となった。古仁屋までの帰りは、船長の粋な計らいで、加計呂麻島の海から見える景勝地を巡る、ちょっとしたツアーになった。徳浜の絶景「ライオン岩」、イタリア・カプリ島の本家に劣らぬ「青の洞窟」（この時は潮位が高く中には入れず）、波の作用で周期的に潮を噴き上げる「くじら岩」である。またその移動の途中、船長が二階の操舵デッキから甲板上でくつろぐ我々に向かって指笛を鳴らして「ほら！そこ！ジンベエザメ！」と叫ぶ。「あ、あー…潜っちゃった」と、サメは我々が「どこ？どこ？」と言っている間に消えてしまったが、船長でもめったにお目にかからないジンベエザメが船のすぐそばにいたらしい。この時ばかりは船長も、僅かばかり興奮していた。

こうして、今年の無人島研修も、充実のうちに無事に終えることができた。今回、寝食を共に過ごした4人の仲間のうち、3人がこの3月で転勤の予定である。無人島にはまた来年も行くことができるだろうが、この気の置けないメンバーと行くことができたのは、最後であった。誰もが私に様々な刺激を与えてくれる、良き仲間たちであった。最後に、私の大好きな映画『スタンド・バイ・ミー』の一節をお借りして、結びの言葉にさせていただく。

「あの頃のような仲間は、もう二度とあらわれない。」